

ASD 児に対する言行一致行動訓練が セルフコントロールに与える効果について

—自己選択と自己教示—

○半田 瞳

高浜 浩二

(作新学院大学臨床心理センター)

(作新学院大学大学院心理学研究科)

KEY WORDS: 自閉スペクトラム症 言行一致 自己教示

I. 問題の所在と目的

ASD や AD/HD などの神経発達症児は、行動の随伴性を予測した上で、自らの行動を制御していくセルフコントロールが機能しにくいと、他者の制御下に置かれやすい(大石,2009)。そのため、自己決定が求められる場面において、他者の制御下に置かれていた児童は、弁別刺激がわからず、言語と行動が不一致になってしまう可能性が考えられる。その結果、約束をしたのに取り組むことができない、期限までに宿題が終わらないなどの他者とのトラブルになりえる要因が生起してしまうのではないかと考えた。

そこで、本研究では自己選択と自己教示をさせる言行一致訓練によって、教科学習場面におけるセルフコントロールを形成できるかどうかについて検討した。なお、本研究を発表するにあたって、保護者に書面と口頭で同意を得た。

II. 方法

(1) 参加児

参加児(以下、A 児)は指導開始時、小学校 2 年の男児であった。医療機関において、広汎性発達障害の診断と、注意欠如多動症的な特徴があるとの指摘を受けていた。WISC-IVの結果は、6 歳 5 か月時で、FSIQ122、VCI140、PRI113、WMI106、PSI96 であった。

セッション中の様子では、教科学習に取り組んでいる最中、強化が遅延すると足をブラブラさせたり、「1 分休憩してきていい?」と要求したりといった様子がみられた。しかし、課題終了直後には「余裕。まだあと 100 枚ぐらいできる。」という言語反応がみられた。また、家庭場面において、学校から帰宅後に「宿題をする」と発言しても、なかなか取り組まないなどのエピソードも語られた。

(2) 言行一致のアセスメント

スキルはあるが、遂行に困難を示す国語課題を実施した。A 児から「1 分休憩してきていい?」などとの発言があった際、1 分だけ休憩していいことを伝えて、自由に遊ばせた。1 分経っても指導者(以下、MT)からの声かけをせず、A 児が自発的に着席するのを待った。5 分経っても戻ってこない場合には声かけをし、座らせた。家での様子などを含め、言語と行動が不一致の状態であることが確認された。

(3) 場面設定

大学附属心理臨床センターで月 3 回程度 1 時間の指導を受けている。その中の 20 分間に、言行一致行動の指導にあてた。MT と A 児は机を挟んで対面に位置した。課題が入っている籠は、A 児から左方向約 2m の位置に置いた。予定表を読ませた後、それと一致した教材(国語の時間であれば、国語の教材を取ってくる)を選択したことを正反応とし、異なった教材を選択したことを誤反応とした。正反応をした場合は、身体強化と言語賞賛を行った。

(4) 手続き

ベースライン (BL) およびプローブ (PR) : 予定表に『国語』『休憩』『算数』と記載した選択肢を提示し、A 児に順番を決めさせた。課題別に 3 つの教材(国語プリント、遊び道具、算数プリント)が入っている籠を確認させ、予定

表を読ませた後(MT「次の時間は?」A 児「国語の時間」)、籠の中から、選んでくるように教示した。正誤の FB は行わなかった。**教材—教科一致条件**: 教科や遊びと課題内容を確認後に、A 児に課題を選択させた。選択した課題を実施させ、FB は行わなかった。**教材確認—選択条件**: かごの中の教材を MT と A 児で確認し、言語反応をさせた(MT「この籠には?」A 児「国語プリント」)。その後、予定表と一致した課題を持ってきた場合を正反応とした。誤反応時には、MT から「今はなんの時間だっけ?」と教示し、再度予定表を確認させ、言語表出させた。**教材確認—選択実施条件**: 教材確認—選択条件同様の手続きに加え、課題を実施させた。正反応、誤反応の時の対応は教材確認—選択条件と同様であった。

IV. 結果

課題における正反応率の推移を図 1 に示した。BL では休憩の時間の言行一致率は 100%であった。しかし、教科の時間において、言行一致率は 0%であった。教材と教科が一致しているのか確認をするために、教材—教科一致課題を行った結果、言語反応としては一致していた。しかし、行動が生起せず、学習場面での正反応率は 0%であった。教材確認—選択条件において、1 度 FB をしたことにより、正反応率が 100%となり、その後は 100%を維持した。

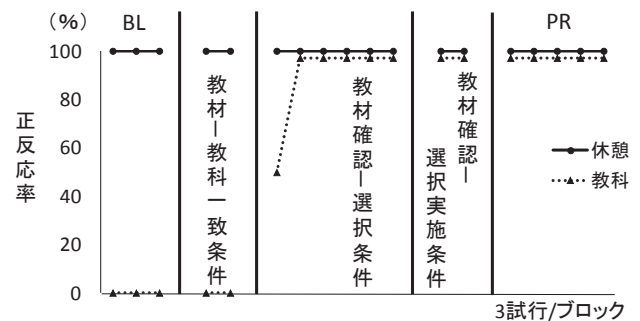


図 1 言行一致における正反応率の推移

V. 考察

自己選択と自己教示をすることで、自身で弁別刺激を提示させる言行一致行動が、セルフコントロールを形成したと考えられる。自己教示をすることにより、他者による弁別刺激で行動が生起するのではなく、自身で弁別刺激を明確にし、行動できたと考えられる。また、課題の順番を決定する自己選択が、セルフコントロールを形成させ、言動と行動が一致したのではないかと考えられた。保護者からは「宿題はやるようになった」とのエピソードも語られた。

今回は言行一致に対して社会的強化を随伴性させた。しかし、日常では自己強化をしていく必要があると考えられる。日常への般化を促す上で、どのような条件が必要かについては、今後の検討が必要であると考えられる。

VI. 文献

大石 (2009) 立教大学現代心理学部, 51, 39-45.

(HANDA Hitomi, TAKAHAMA Kohji)